グループワーク論の新しい展開をめざして

黒木保博

序

わが国のグループワーク研究の重要な課題の一つとして、グループワーク理論の実践的検証の必要性が挙げられる。主にアメリカより紹介あるいは導入されたグループワーク理論の検証がわが国においては未だに十分にされていないと考えられるのである。勿論、紹介・導入されたグループワーク理論は隣接科学の成果に頼る所が大きく、それらの実績を背景に構築されたものであった。今日でも隣接科学の実績がグループワーク論に積極的に取り入れられているが、何故か、グループワーク理論そのものを検証し、その成果を新しい所説に繋いでいく研究は一部にしか見当らないのである。たとえば近年、R・D・ヴィンターやW・シュワルツの新しいグループワーク理論の紹介も行なわれているが、これらの理論とわが国の社会福祉の現状と関連させての批判や検討はほとんど行われていないと言えよう。実践のための裏づけと方向づけはいつもされているものの、果してそれらのグループワーク理論は有効性があったのか、あるいは無効性だったのかという論証が出て来ないのである。「福祉の実践者であるソーシャルワーカーは先行業績に学ぶという、いわゆる継続的な実践研究の経験に乏しく、それらを批判吟味し、分析検討をして、先達の実績を発展させ、さらにはそこから独創的な理論や新しい所説を構築していくという側面にも欠けている」[1]。確かに実践者による批判吟味や分析

検討の不十分さは指摘できるものの、グループワークに関して言えば、グループワーカーそのものの不足とともに、グループワークの理論と技術を教え、訓練をするべき社会福祉教育機関、担当者にも反省すべき点があると思われる。自戒の念を含めてこれまでのわが国のグループワーク教育を振り返れば、教室において実践理論と技術論の紹介はあっても、実際にグループワーク理論を生かせるように訓練が出来ていたかが問われて来るのである。「理論」と「実践」の緊密な結び付きを考えるならば、実践の場で理論を生かせるようなシスティマティク（Systematic）な教室での教授法と、さらには卒業後のグループワーク教育のあり方も積極的に検討されなければならない。

そこで、本稿ではグループワーク論の新しい展望をめざしてのまず第一歩として、ローレンス・シュルマン（Lawrence Shulman）のソーシャルワークにおける「援助過程技術論」の紹介と検討を試みたい。後述するごとく、シュルマンは援助過程にワーカーが用いる「技術」（Skills）は、うまく説明できるものであり、援助を与え、受ける際に働く行動力学は神秘なものではないと確信している。この信念によって援助過程技術は明確になり、説明可能であり、教授することができるとしている。

グループワーク論を教室にて教授する一人として、これまでの反省から社会福祉方法論の価値観・目標を含む理論とともに、グループワークを学んだものが理論に裏づけされた援助過程技術を身につけて実践現場で生かしていくこと、そしてそこから次の段階である理論への批判吟味、分析検討が可能になってくると考えるからである。この試行錯誤のためにはシュルマンの援助過程技術は有効であると考えられるが、究極的にはこれをつかっての私自身の実践研究を目的とするためでもある。グループワーク論がわが国の多様化する社会福祉問題に直面している人々への援助方法論として、妥当性・有効性（Validity）を示すことができるかの研究こそ必要であり、そのことは、今後のグループワーク論の新しい展開をもたらすことになると思われる。

第一節　W・シュワルツ（William Schwartz）とL・シュルマン（Lawrence Shulman）

ローレンス・シュルマンはW・シュワルツの理論を継承し、さらにこれを発展させた一人である。シュルマンは著書として、① *A Casebook of Social Work with Groups—The Mediating Model*—1968 ② *The Skills of Helping Individuals and Groups*, 1979 ③ *Identifying, Measuring, and Teaching Helping Skills*, 1981 がある。

L・シュルマンの援助過程技術論を紹介する前にW・シュワルツのグループワーク論について簡単に触れておきたい。

W・シュワルツは、R・ヴィンター（Robert, D. Vinter）とともに一九六〇年代以降のグループワーク理論の代表である。わが国においても大利一雄や前田ケイらによってシュワルツ理論が詳しく紹介されている。[2] シュワルツ理論は「交互作用モデル」と呼ばれ、システム論と場の理論を基礎理論としている。その特徴としては、①、個人と彼（女）をとりまく社会との交互作用に焦点をあて、個人と社会の双方をともに援助しようとするところである。[3] ②、また、グループワーカーは「媒介者」としてグループに参画していくこと、つまり、グループ過程で生じてくる対人関係の相互援助的側面を重視することが強調されている。グループ・メンバーによるグループワークを重視し、ワーカーは媒介者や情報提供者としての役割を果すべきである、としたことである。

一方ではシュワルツのグループワーク論は、一九六〇年代以降の社会福祉方法統合論の先駆的役割を果したこと、すなわち、従来と異なってグループワークをソーシャルワーク理論のなかに包み込んだ[4]ことでも注目を集めていた。

シュルマンは自他ともにシュワルツ理論を踏襲し、これを補強・発展させたことを認めているが、ここでシュルマンがシュワルツ理論をどのように理解し、表現しているかについて紹介してみよう。

まず、シュルマンは実践理論（Practice Theory）をどのように考えるかについて、シュワルツの三つの概念「枠組み」に触れている。第一には、科学の発見から概念が導き出されるように、社会の実体を適切な局面で枠組みしていく

こと、第二には、政策課題になっているような特有な価値観と目標を定義し、概念化していくこと、第三には、相互関係のある基本的行動原則を公式化していくことである。つまり、シュルマンはこれらの枠組みより、実践理論は我々が人間行動と社会環境（組織）について何を理解しているかについて述べられるべきであり、そのためにはソーシャルワーカーが考えるべきだと期待される特有な目標や結果こそが基盤となってくる。これによって、ワーカーがその目標を達成するために行動したことを解説することで実践理論が考えられていくとしている。[5] たとえば、この実践理論化の方法として、ワーカーが援助を始めるときに、クライエントが新しい環境の中で、どのように行動するのか、一方ではワーカーもこの初めての場面で何をすべきなのかという両面から考えることによって「仮説」が成立してくるのである。ここにワーカーにとっての技術として「契約」（Contracting）という特有のワーカー行動が必要となる。

さて、シュルマンの意味する援助過程技術とは、ソーシャルワーカーが援助過程の遂行に用いる「行動」であり、専門職としての仕事を成し遂げるための一連の「行動」のことである。

シュルマンの援助過程技術論を理解するための五つの概念について詳細に触れておきたい。

(1) クライエントとシステムとの相互作用

シュルマンはシュワルツと同様に、ワーカーの援助過程の焦点にクライエント（個人）と彼（女）をとりかこんでいるシステムとの相互援助作用を挙げている。従来、ソーシャルワーカーは医療モデルを処遇手続きとして採用してきた。つまり、クライエントについて調査し、診断し、そして出来上った治療・援助計画にもとづいて処遇を試みてきたのである。しかしながら、クライエントを「静止」状態で考えている傾向があること、あるいは、神経症だとか反抗的であるというように記述されたクライエントの特徴の病状のみが強調されていたことへの批判がでてきていた。

そこで、シュルマンは力動的システム理論を用いてのクライエントとシステムとの相互援助作用を強調している。[6] こ

れはクライエントを分析するのではなく、クライエントとクライエントにとっての重要なシステムとの相互作用に焦点をあわせてみるのである。たとえば、ひどいうつ病の女性入院患者のケースを考えていけば、このクライエントをとりかこむシステムとして、夫、子供、職場、親とか親類、友人、あるいは入院先の病院、医者、病棟とか病室、他の人院患者などが考えられる。そこでクライエントの病状とか、詳しい生育歴からの原因をワーカーは焦点に考えるのではなく、クライエントとクライエントにとって重要に関係しているシステムとの相互作用状況に焦点をあてていくのである。クライエントと夫との人間関係はうまくいっていたか、日常生活で良いコミュニケーションが成立していたか、あるいは病棟で他の患者と良い人間関係を保っているか、クライエントが他の患者に接近したときに、クライエントを他の患者、あるいはインフォーマルな患者グループが受容したか、逆に拒否したかについて理解していくのである。この様なクライエント側の相互作用とともに、家族・友人・他の患者などのシステム側のクライエントに対する接近や拒否などにも注目をし、お互いの行動に対する反応と結果に焦点をあてることになる。この立場からは、うつ病が治療のための病気ではなく、実はこのクライエントにとって重要なシステムとの相互作用の崩壊による兆候であると理解できる。クライエントの問題を解決するためには、クライエント自身が断絶している、あるいは本来の機能を果していない重要なシステムに近づくことであり、そのための努力を開始することである。システムそのものも、クライエントと再結合するために接近する方法を見つけださねばならないかもしれない。しかしながら、この再結合は困難が予想される。ここにワーカーがクライエントとシステムとの「媒介者」として相互援助過程に介入する意義が見出せるのである。ワーカーのやるべき役割・努力はクライエントを治療することではなく、クライエントとクライエントにとって重要なシステムとの相互作用に何らかの刺激・衝撃を与えることである。(7)

(2) 共生モデル (Symbiotic Model)

では、このようなクライエントとシステムに対してワーカーはどのように援助するのであろうか。

先に述べたクライエントを取り囲むシステムとの相互作用を調べると、クライエントはそれらのシステムにかすかに接近する態度をみせる反面、システムからの退却・断絶の兆候もみせ、いわゆるアンビバレンス（ambivalence）の様子を示している。クライエントは表面的には会うかもしれないが、反面あきらめと努力することが無駄なことと考えているかもしれない。クライエントは明らかに自分とシステムの間に障壁を築き、援助に接近しようとするワーカーを含めてシステムを観察をしているにちがいないのである。

シュルマンはこの場面で、シュワルツの「共生」という仮説を用いている。すなわち、「人間関係における〝共生〟モデルとは、個人とその個人を育ててきた社会（集団）との関係であり、お互いの人生と成長のためにお互いを必要とし、お互いを強化するために接近する」[8]ことである。「共生」という意味は、個人と社会に関して一人の人間とシステムとの相互欲求を表わすものとして用いられている。クライエントのニーズとは彼（女）のまわりのシステムとの相互作用であり、まわりのシステムからの退却ではないはずである。このようにして社会は積極的な関わり合いをもつ唯一の統合された個人としてクライエントとの利害関係を結んでいるといえよう。これまで「共生」は母と子の関係のように、ややもすると不健康な相互過剰依存性になるという専門的含蓄のある言葉であった。シュワルツは「共生」をお互いの基本的関心というような相互性を強調するものとして使っており、一人一人の福祉のために社会的責任を重要な確信とする相互依存ということを意味している。と同時に一人一人の個人が他人と共に肯定的関係の中で人生の最高の満足を発見することの認識をも意味しているのである。[9]

所で、シュワルツとシュルマンの「共生」概念に対する疑問として、個人と社会とは今日ではお互いに遠い存在であり、果して彼らの「共生」概念が成立するかどうかが出されてくる。この疑問に対してはシュルマンはシュワルツの表現を借りて「今日のようにゆがめられ、複雑な社会にあっては、個人と社会との共生はいろいろの変化レベルで分散し、

わかりにくく発達をしている。精神病理学の立場からは子供達の発育に関する普通の問題は共生的接触が分離しているかもしれない。しかしすべての所で共生的接触の可能性が含まれている。[10]」つまり、自己本位の個人とその人を取り囲むシステムは時々、専門的援助過程の中でもうまく行かなくなることがある。しかしながら、この個人とシステムはお互いが他人の利己主義によって共生概念に反対する概念としてではなく、むしろ、相互関係でお互いが回復するための概念でなければならないとしている。

ワーカーはクライエントがクライエントの回りの人々との結合を見つけ出すための重要な援助者であることを確信し、この結合のための部分的な努力こそが、クライエントが未だに精神的に生きつづけようというかすかな糸口を探すことになるのである。ワーカーはクライエントに生じてくる防御に騙されることなく、クライエントのうつ症や無感動の中にも隠されている人生への望みを継いでいくことになる。援助の仕事はクライエントの再動機づけではなく、そこに内在している動機を発見し展開することである。ワーカーはクライエントのために接近できる家族、友人、インフォーマル・グループ、病院システムを求めていくのである。もしもクライエントの夫が感情を閉ざして逃げようとするとき、ワーカーは夫が隠そうとする心の苦痛について接近していくのである。

「共生」概念では個人とシステムとの緊急でかつ重大な関係や関心の相違の存在を無視していない。人生上での相互作用は衝突や対決を含んでいるし、すべての利害が相互関係でもない。

効果的な援助者は個人と社会との間にある相違をはっきりと明らかにすることによって統合こそが感情の限界を包みこむ真の人間援助過程をめざしているのである。

(3) 変化する力

個人とシステムには相互関係の手段として可能性を潜めた力、すなわち「個人と社会との契約」(the individual-

social engagement）が先に述べた共生と密接な仮説となっている。この仮説は過去の経験に縛られず、個人もシステムも自分のために行動することが可能であるということに基づいている。

従来は、問題行動の因果関係を過去の経験に求めてきたが、このことは一方では個人が新しい環境に適応する時あるいは危機的状況に遭遇したときは、過去の経験によって問題解決の道が与えられてくるという立場である。このことは、クライエントのその状況を前もって判断しつつ、クライエント自身による問題解決力を軽視することにもつながってくるといわれている。

これに対し、シュワルツは、個人は行動によって自分自身を最大限に表現しており、その行動がたとえほんの小さな一歩であったとしても状況を変化する力を増大していくものと考えている。[11] 個人とシステムは、過去の経験よりもそれぞれの自分のその時点での利己主義によって行動する能力を有しているということをワーカーは理解しておかねばならない。クライエントによる自己描写からの弱点こそがワーカーのクライエント援助の中心的課題ではなく、クライエントの直面する問題は重要なシステムとの相互作用によるものであり、クライエントが問題解決に無気力となり自信喪失の状況下でのワーカーの援助はそのクライエントの自信をとり戻してやることである。ワーカーはクライエントとシステムとのつながりに敏感となり、お互いが可能性を求めて接近してくることによる行動を起すための必要性を作っていくのである。クライエントは結果を決定する力を保有しており、この力の信念と各人が独立をしていること、あるいは不健康よりも健康を優先するという概念がワーカーの実践には必要であるとシュルマンは主張している。[12]

(4) 共生や可変力の障害要因

個人とその個人の重要な環境となっているシステムが相互ニーズや共生によって結びつけられ、お互いに変化する力をもち、接近し、効果的に作用する能力があるというものの、シュワルツは次の三点がこれらをうまく作用させない障

害になってくると指摘している。[13]

① 複雑化するシステム
② 個人と関連システムとの利害関係
③ コミュニケーションの障害

①…たとえば、核家族への変化が従来家族システムが維持してきた重要な援助機能を切り離し、また社会基準や価値観の急激な変化が親と子のシステムに社会的圧力をかけている。女性の役割変化に対して夫は新しい態度を必要としている。社会福祉施設、医療施設、教育施設はきめ細かい援助のために複雑化し、利用する対象者との関係をも複雑化しているのである。

②…人々は相互に関心を持ち、かつ個人として独立するが、成長過程においてはお互いの関心の相違やお互いの利己主義からの衝突が起る。結婚にしても男性は新しい満足すべき人間関係を結ぶ相手を得るためには何かの代価を支払うことによってのみ夫としての行動規範を獲得でき、そのことは伝統的役割を維持するための利害関係をもつのである。女性にとっても夫や家族が考えている魅力的な妻になることと、彼女自身が確信している妻の姿とは異なっている場合に夫に対して驚き、衝突し、利害関係が生じる。共生関係を生みだすには、変化することに対し常にアンビバレンスを生じるものであるが、急激な変化は社会のすべての人々に不安を生みだし、人々は逆に以前のままの状態を維持しようとする。学校や病院などの大きな機関は学生・患者に対し現在の秩序に協調するように、問題を起こさないように、規則に従うようにさせることは容易であると考えがちであるが、このことが効果的な教育や治療の障害となりやすい。複雑なシステムが個人と社会に常にアンビバレントを生じさせており、お互いの利害関係を明らかにしてくる。

③…社会的規範は時として人間関係に分離を起こし、相互理解をますます難しくしている。ここから起因する苦痛やタブーへの感情について、人々がお互いに言語によって分かち合うことが難しくなっている。つまり我々にとって最っとも重要な会話が、解読するには極めて難しい非言語的コミュニケーションになってきているということである。親と子供、生徒と教師の間においても、言語的コミュニケーションよりは非言語的コミュニケーションによって自分の苦痛を相手に伝えようとしている。それも直接には関係のない場面において表現をされている傾向にある。

以上のごとく、個人と社会との契約において基本的欲求が、状況の複雑化や欲求の拡散化、コミュニケーションの難解さによってもろくなり、容易にあいまいとなっている。このような「共生の拡散」の可能性があるからこそ専門的援助の必要性がある。つまり、「障害が個人と重要なシステムとの相互依存を容易にあいまいにできるという事実に我々の仕事が関係しているからである。個人と重要システムがこの重要な結びつきを見失った時に第三者が彼らを再び相互理解するための援助を必要とする」[14]のである。

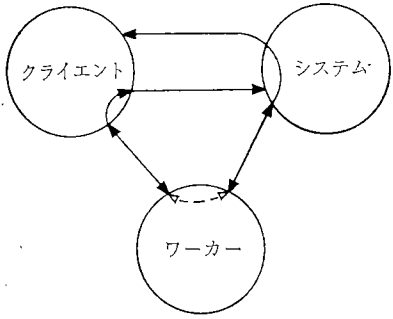
(5) 援助者の機能

シュルマンはシュワルツのワーカー機能[15]の中心的概念を用い、さらにそれを専門的援助者に拡大して適用しようとしている。

シュルマンによれば、児童養護指導員、看護婦、学校カウンセラー、医者、教師などは異なる機能をもち、歴史的にも異なる焦点にて専門職として働いてきたが、これらの専門的援助者も「媒介者」として援助過程を有しており、それぞれに第三者として、他人と重要なシステムとの相互作用に良い刺激・衝撃を与える役割を期待できるからである。

シュワルツはソーシャルワーカー専門機能の定義として「自己満足と相互ニーズから個人と社会がお互いのために接近する過程を媒介する」[16]としている。シュワルツの機能は次の図にて説明されるが、左側のクライエントは重要なシス

テムに交渉を試みながら、一方では同時に起ってくるシステム側の防御、すなわちシステム側のニードでこれを切り離そうとする防御に対してこれをあきらめさせようとする一連の働きかけである。また、右側のシステムはアンビバレントな状態ながらクライエントに接近することを表わしている。真中のワーカーはクライエントとシステムがお互いの障害を乗り越える努力をするように援助する機能と技術を表わしている。



ワーカーの援助機能

シュルマンはこのシュワルツのワーカー機能ではあまりにも限界があるのではないかという疑問に対しては、次の様な概念にて説明をしている。すなわち、シュルマンの概念ではシュワルツのワーカー機能より広くとらえており、擁護者（advocacy）のような行動をも含んでいる。たとえば、結婚カウンセリングの場合に両方から「ワーカーはどちらの味方か？」という質問が出てくるが、ワーカーにとってはいかにして両方の立場に立つことができるかが主眼になっているのである。ワーカーが一方の立場に立ってしまった時にはワーカーとしての専門的援助が果せなくなるのは明らかである。援助者が何をすべきかが明確であればそれを首尾一貫して堅持することによってのみワーカー機能は果せることになる。

第二節　シュルマン理論の特徴

以上のごとく、シュルマンの援助過程技術論の重要な概念を詳細に紹介してきた。

シュルマンの特徴を明らかにするならば、第一にはシュワルツ理論を基礎としながらもさらに理論を拡大していることである。ソーシャルワーカーのみならず、同じく専門的援助過程を仕事としている人々にも適用できる理論をめざし

ている。つまり援助する立場にある人々に当てはまる援助過程技術論をめざしたことである。第二には、援助過程に用いるワーカーの技術がソーシャルワーカーの実践場面では注目をされておらず、またこの種の実践モデルは分かりにくくなっているとの認識からワーカーの技術（行動）を27のタイプに明確化したことである。先述のごとく援助過程技術は明確化できるし、説明でき、かつ教えることが可能だとしている。シュワルツはこの27のタイプを明確にするため、ビデオテープやテープレコーディングによってワーカーが面接にて何をしたかを引用し、ワーカーとクライエントの専門的援助関係の発展過程におけるワーカーの援助過程技術の類型化の研究をしていることである。第三には、この援助過程技術論が個人とグループを対象にしての展開をめざしていることであるシュワルツは、ソーシャルワーク理論にグループワークを包みこんで注目をされたが、シュルマンはこれを援助過程技術論としてさらに拡大発展させている。もちろん、シュルマンのこれまでの研究から個人よりもグループに関心があると思われる。

以上のシュルマンの特徴は一九八一年刊の *Identifying, Measuring, And Teaching Helping Skills* にて述べられている。

（未　完）

注

（1）岡本民夫、「社会福祉展望ノ2—実践方法論部門」『社会福祉研究』第三二号鉄道弘済会一九八三・四・七九ページ。

（2）たとえば、大利一雄、「北米グループワークの展望」『青少年問題研究』、第二二号、一九七三、W・シュワルツ、S・R・ザルバ編、前田ケイ・大利一雄・津金正司共訳『グループワークの実際』相川書房、一九七八年、武田建・大利一雄共著『新しいグループワーク』日本YMCA同盟出版部、一九八〇年。

（3）大利一雄『新しいグループワーク』日本YMCA同盟、一九七八年、七四ページ。

（4）前掲書、七五ページ。

（5）Lawrence, Shulman, The Skills of Helping-Individuals and Groups, F. E. Peacock Publishers, 1979, p. 3.

（6）Ibid., p. 5.

（7）Ibid., p. 6.

(8) Ibid., p. 6.
(9) Ibid., p. 6.
(10) Ibid., p. 7.
(11) Ibid., p. 8.
(12) Ibid., p. 8.
(13) Ibid., pp. 9-10.
(14) Ibid., p. 10.
(15) 大利一雄・前掲書、八七―八九ページにシュワルツのワーカー機能が詳しく紹介されている。
(16) Ibid., p 11..